

『成唯識論』の三性説の解釈について

吉 村 誠

一 序言

唯識では、識によって現わされた存在の形態に、遍計所執性・依他起性・円成実性の三性を立てる。識によって現わされたものは、衆縁によつて生じるため実在しないものであるが、実在するもののようにみえる。これを依他起性という。愚者は依他起性の上に妄あやまつて我・法を実在するものとみて執着するが、それらは性も相もすべて無である。これを遍計所執性という。依他起性の上に妄執された実我・実法は空であり、それらの空（我空・法空）によつて真如まにちが顕あわされる。これを円成実性という。

三性説の基本構造は『解深密経』『瑜伽師地論』で確立し、『大乘莊嚴経論』『弁中辺論』を経て『撰大乘論』『唯識三十頌』に継承された。世親の『唯識三十頌』では、三性説が第二〇頌から第二二頌の三頌に要約されている（数字は頌の番号。以下同じ）。

(20) 由彼彼遍計、遍計種種物。此遍計所執、自性無所有。

(21) 依他起自性、分別縁所生。圓成實於彼、常遠離前性。

(22) 故此與依他、非異非不異。如無常等性、非不見此彼。

(20) 彼彼の遍計に由りて、種種の物を遍計す。此の遍計所執の、自性は所有無し。

『成唯識論』の三性説の解釈について(吉村)

一九四

- (21) 依他起自性の、分別は縁に生ぜらる。円成実は彼に於て、常に前のを遠離せる性なり。
(22) 故に此れは依他と、異にも非ず不異にも非ず。無常等の性の如し。此れを見ずして彼をみるものには非ず。

『唯識三十頌』の注釈の集成である玄奘訳の『成唯識論』では、三性説について世親の頌にはない相分・見分などの觀念を用いた複雑な議論が展開されている。基の『成唯識論述記』によれば、そこにはインドの難陀・安慧・護法等の三性説の解釈が含まれているという²⁾。基の伝承の妥当性については検討の余地があるが、『成唯識論』の議論の中に玄奘が支持する三性説の解釈が示されていることは確かである。小稿では、『成唯識論』の三性説に関する議論を検証し、そこで批判ないし支持されている解釈を明確にすることで、その翻訳意図を推定することにした。

二 『成唯識論』の遍計所執性の解釈

『成唯識論』では、唯識と三性の関係について「三性亦不離識(三性も亦た識を離れず)」³⁾と言い、『唯識三十頌』の第二〇頌から第二二頌を引用した後、遍計所執性・依他起性・円成実性の順に解釈している。先ず、遍計所執性については、次のように大きく二つの解釈に分けられている(一)は『成唯識論述記』による補足)。

- (20) 【難陀等】周遍計度故名遍計。品類衆多説爲彼彼。謂能遍計虚妄分別。即由彼彼虚妄分別、遍計種種所遍計物。謂所妄執蘊處界等、若法若我自性差別。此所妄執自性差別、總名遍計所執自性。如是自性都無所有。理教推徴不可得故。【安慧・護法等】或初句顯能遍計識、第二句示所遍計境。後半方申遍計所執若我若法自性非有。已廣顯彼不可得故。初能遍計自性云何。【安慧等】有義、八識及諸心所有漏攝者、皆能遍計。…中略…【護法等】有義、第六第七心品執我法者、是能遍計。…中略…次所遍計自性云何。攝大乘説是依他起。遍計心等所縁縁故。

- (20) 【難陀等】周遍に計度するが故に「遍計」と名く。品類衆多なれば説きて「彼彼」と為す。謂く能遍計の虚妄分別な

り。即ち彼の虚妄分別に由りて、「種種の」所遍計の「物を遍計す」。謂く妄執する所の蘊・処・界等の、若しくは法・若しくは私の自性と差別となり。此の妄執する所の自性と差別とを、総じて「遍計所執の自性」と名づく。是くの如き自性は都て「所有無し」。理・教もて推徴するに得べからざるが故に。

【安慧・護法等】或いは初句は能遍計の識を顕し、第二句は所遍計の境を示す。後の半は方に遍計所執の若しくは我・若しくは法の自性有に非ざるを申ぶ。已に広く彼の不可得なるを顕すが故に。初めの能遍計の自性とは云何ん。【安慧等】有義は、八識及び諸もろの心所との有漏に摂めらるるは、皆な能遍計なり。…中略…【護法等】有義は、第六と第七との心品の我・法と執するは、是れ能遍計なり。…中略…次の所遍計の自性とは云何ん。『撰大乘』に「是れ依他起のみ」と説く。遍計心等の所縁縁なるが故に。

すなわち、【難陀等】第一積では、あまねく思考することから「遍計」といい、種類が多いことから「彼彼」という。それは能遍計の虚妄分別である。それらの虚妄分別に「由り」、「種種の」所遍計の「物を遍計す」る。これが妄執された五蘊・十二処・十八界の実法・実我という自性や差別相である。「此の」妄執された自性と差別相をすべて「遍計所執の自性」という。このような自性はすべて「所有無し（存在しない）」、という。ここには、愚者は能遍計の虚妄分別によつて所遍計の事物をみるが、そのうち所遍計の事物が遍計所執性である、という解釈が示されている。『述記』によればこれは難陀等の解釈であり、①能遍計と②所遍計＝遍計所執性からなることから二重遍計と称される。

また、【安慧・護法等】第二積では、第二〇頌のうち、第一句は能遍計の識を示し、第二句は所遍計の境を示し、後半二句（第三句・第四句）は遍計所執の自性が存在しないことを述べている、という。ここには、能遍計の識と所遍計の境によるものが遍計所執性である、という解釈が示されている。『述記』によればこれは安慧・護法等の解釈であり、①能遍計と②所遍計と③遍計所執性からなることから三重遍計と称される。

さらに第二積では、能遍計の自性について、八識の心・心所であるとする説と、第六識・第七識の心・心所であるとする説とがある、という。『述記』によれば、前者は安慧の説であり、第六識・第七識で我執が起き、前六識・第八識で法執が起るといふもの。後者は護法等の説であり、第六識・第七識で我執・法執が起るといふものである。また、所遍計の自性は、

『成唯識論』の三性説の解釈について（吉村）

依他起性である。能遍計の心・心所の所縁縁（所縁としての縁。認識対象）は依他起性だからである、という。以上の説明を図示すると、次のようになるであろう（安慧・護法の依他起性の解釈については後述する）。

〔難陀等の解釈〕：二重遍計

①能遍計（虚妄分別）〔＝依他起性〕〔＝見分〕

②所遍計（物）〔＝遍計所執性〕〔＝相分〕

〔安慧・護法等の解釈〕：三重遍計

①能遍計（識。心・心所）

②所遍計（境。依他起性）

③遍計所執性

難陀等の解釈では、所遍計の事物が遍計所執性であるのに対し、能遍計の虚妄分別が依他起性であるということになる。⁽⁸⁾ 所遍計＝遍計所執性の境と、能遍計＝依他起性の識が相對關係にあるとすれば、両者がともに無くなることが円成実性であるという解釈が成立するであろう。⁽⁹⁾ この解釈は、中国で隋末唐初に流行した「境識俱泯」の三性説に類似している。撰論学派では、真諦訳の『撰大乘論』世親釈や『顯識論』などの三性説に基づいて、分別性（遍計所執性）の無相と依他性（依他起性）の無生とが真实性（円成実性）であるという解釈が盛んに行われた。⁽¹⁰⁾ この解釈は、玄奘の帰国後、その門下の唯識学派によって厳しく批判されることになった。玄奘が『成唯識論』で難陀等の三性説を批判的に紹介しているのは、『撰大乘論』世親釈やそれに基づく撰論学派の三性説の解釈を、否定する意図があるからではないかと推測される。

三 『成唯識論』の依他起性の解釈

次に依他起性の解釈を検討する。依他起性については、遍計所執性や円成実性と対比するかたちで、次のような二つの解釈

が述べられている。

(21a) 遍計所執其相云何。與依他起復有何別。【安慧等】有義、三界心及心所、由無始來虛妄熏習、雖各體一而似二生。謂見相分。即能所取。如是二分情有理無。此相說爲遍計所執。二所依體實託緣生。此性非無名依他起。虛妄分別緣所生故。…中略…【護法等】有義、一切心及心所、由熏習力所變二分、從緣生故亦依他起。遍計依斯妄執、定實有無一異俱不俱等、此二方名遍計所執。…中略…由斯理趣、衆緣所生心心所體及相見分、有漏無漏皆依他起。

(21b) 依他衆緣而得起故。頌言分別緣所生者、【漏・無漏】應知且說染分依他。淨分依他亦圓成故。【常・無常】或諸染淨心心所法皆名分別。能緣慮故。是則一切染淨依他、皆是此中依他起攝。

(21a) 遍計所執の其の相云何ん。依他起と復た何の別なること有るや。【安慧等】有義は、三界の心及び心所、無始より來た虚妄に熏習するに、各おの体一なりと雖も而も二に似て生ず。謂く見・相分なり。即ち能・所取なり。是の如き二分は情には有りて理には無し。此の相を説きて遍計所執と爲す。二の所依の体は實に縁に託して生ず。此の性の無に非ざるを依他起と名く。虚妄分別の縁に生ぜらるるが故に。…中略…

【護法等】有義は、一切の心及び心所の、熏習の力に由りて變ずる所の二分も、縁より生ずるが故に亦た依他起なり。遍計といふは斯れに依りて妄りて、定めて實に有なり無なり一なり異なり俱なり不俱なり等と執する、此の二を方に遍計所執と名く。…中略…斯の理趣に由りて、衆縁に生ぜらるる心・心所の体と及び相・見分とは、有漏にもあれ無漏にもあれ皆な依他起なり、といふ。

(21b) 他の衆縁に依りて起るを得るが故に。頌に言ふ「分別緣所生」とは、【漏・無漏】心に知るべし、且らく染分の依他のみを説けりと。淨分の依他は亦た円成にもあるが故に。【常・無常】或いは諸もろの染・淨の心・心所法を皆な分別と名く。能く縁慮するが故に。是れ則ち一切の染・淨の依他は、皆な是れ此れが中の依他起に撰む。

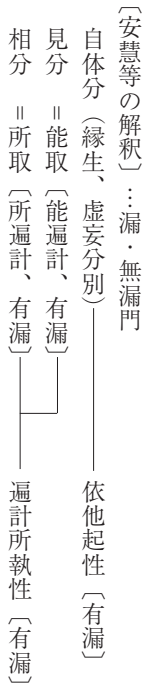
すなわち、【安慧等】第一釈では、心・心所の体（自体分）が、無始爾來の虚妄分別による熏習（種子）によつて見分・相

分を生じる。これが能取・所取である。これらは妄情にとつては実有であるが（妄有）、真理としては虚無である（理無）。この虚無である相を遍計所執性という。見分・相分の所依である心・心所の体（自体分）は、因縁によつて生じる。この虚無ではない性を依他起性という。それは虚妄分別による熏習（種子）を因縁として生じる、という。これは識の自体分が依他起性であり、見分・相分が遍計所執性であるという解釈である。『述記』によればこれは安慧の解釈である。

また、【護法等】第二釈では、心・心所の体（自体分）が熏習（種子）により変じる見分・相分も、因縁によつて生じるので依他起性である。この見分・相分に妄執することが遍計であり、この妄執された見分・相分を遍計所執性という。したがつて、諸縁によつて生じる心・心所の体（自体分）と見分・相分は、有漏であれ無漏であれみな依他起性である、という。これは識の自体分・見分・相分⁽¹³⁾はみな依他起性であり、妄執された見分・相分が遍計所執性であるという解釈である。『述記』によればこれは護法の説である。

第二一頌の前半二句（第一句・第二句）は、上述の二釈に従つて二通りの読み方がある。【漏・無漏】第一釈に従うならば、「依他起自性の（虚妄）分別は縁に生ぜらる」と読む。ここでは染分の依他（有漏の有為法）のみが説かれ、浄分の依他（無漏の有為法）は円成実性で説かれるという解釈である。依他起性と円成実性を有漏・無漏で区別することから、これを漏・無漏門という。【常・無常】第二釈に従うならば、「依他起自性は分別の縁に生ぜらる」と読む。広義では分別は縁慮であることから、ここには染分・浄分のすべての依他（有漏・無漏の有為法）が説かれているという解釈である。円成実性と依他起性を無為（常）・有為（無常）で区別することから、これを常・無常門という。

以上の説明を図示すると、次のようになるであらう。



〔護法等の解釈〕…常・無常門

自体分（縁生）

依他起性（有漏・無漏）



護法の解釈では、依他起性に相分・見分・自体分の三分があるとす。その主な理由は、見道以後の後得智に自体分のみならず相分・見分があることを認めるからである。したがって、相分・見分は依他起性に属し有漏・無漏にわたるため、遍計所執性に属する有漏の所取・能取とは異なることになる。これに対し、安慧の解釈では、後得智に自体分のみを認め、相分・見分があることを認めない。したがって、相見・見分は遍計所執性に属する有漏のものであり、所取・能取と同じということになる。また、依他起性に有漏（染）・無漏（浄）の二分があるという解釈は、『撰大乘論』の二分依他説に由来する。¹⁴これを、世親釈や無性の第一釈では漏・無漏門で解釈し、無性の第二釈では常・無常門で解釈している。このことから、『成唯識論』の常・無常門の二分依他という解釈は、『撰大乘論』の世親釈よりも無性に、さらには無性の第一釈よりも第二釈に基づくものと言えるだろう。

四 『成唯識論』の円成実性の解釈

最後に円成実性の解釈を検討する。円成実性については、依他起性と対比するかたちで、次のような解釈が述べられている。

(1cd)

【常・無常】二空所顯、圓滿成就諸法實性、名圓成實。顯此遍常體非虛謬、簡自共相虛空我等。無漏有爲、離倒究竟勝用周遍、亦得此名。然今頌中、説初非後。【依・円相待】此即於彼依他起上、常遠離前遍計所執、二空所顯眞如爲性。説於彼言、顯圓成實與依他起不即不離。常遠離言、顯妄所執能所取性理恒非有。前言、義顯不空依他。性顯二空非圓成實。眞如離有離無性故。

『成唯識論』の三性説の解釈について（吉村）

『成唯識論』の三性説の解釈について（吉村）

1100

22abc 由前理故、此圓成實與彼依他起、非異非不異。…中略…如彼無常無我等性。…中略…法與法性理必應然。勝義世俗相待有故。

22d 非不證見此圓成實、而能見彼依他起性。未達遍計所執性空、不如實知依他有故。無分別智證眞如已、後得智中方能了達、依他起性如幻事等。…後略¹⁶

21cd 【常・無常】二空に顯され、円満し成就する諸法の実性を、円成実と名く。此れ遍・常にして体虚謬に非ざるを顯し、

自と共との相と虚空と我との等きとを簡ぶ。無漏の有為は、倒を離れ究竟して勝用周遍すれば、亦た此の名を得。然も今の頌の中には、初のを説きて後には非ず。【依・円相待】此れ即ち彼の依他起の上に於て、常に前の遍計所執を遠離して、二空に顯さるる眞如を性と為す。「彼に於て」といふ言を説けるは、円成実は依他起と不即不離なることを顯す。「常に遠離す」といふ言は、妄所執の能・所取の性（遍計所執性）は理として恒に有に非ざることを顯す。「前の」といふ言は、義として依他を空ぜざるを顯す。「性」といふは二空の円成実に非ざるを顯す。眞如は有を離れ無を離るる性なるが故に。

22abc 前の理に由るが故に、此の円成実と彼の依他起とは、異にも非ず不異にも非ず。…中略…彼の無常と無我等の性の如し。…中略…法と法性とは理必ず応に然るべし。勝義と世俗とは相待して有るが故に。

22d 此の円成実を証見せずして、而も能く彼の依他起性を見るものには非ず。未だ遍計所執性の空なるに達せざるときは、実の如く依他の有を知らざるが故に。無分別智の眞如を証し已りて、後得智の中に方に能く依他起性は幻事等の如しと了達す。…後略

すなわち、【常・無常】二空（我空・法空）によつて顯された諸法の実性を、円成実性と言う。これは無為法（眞如）が普遍・常住であることを示すものであり、有為法に自相・共相（無常・苦など）があることは異なるものである。無漏の有為法（智慧など）も円成実性と言えるが、頌は初めの無漏の無為法（眞如）について説くものである、という。円成実性は無為（常）であり、有為（無常）と区別されていることから、これも常・無常門による解釈である。

また、【依・円相待】円成実性は依他起性の上から遍計所執性を取り除き、二空によって顕された真如である。すなわち、頌の「円成実は彼に於て、常に前のを遠離せる性なり」のうち、「彼」は依他起性、「前」は遍計所執性である、という。頌の解釈では、円成実性と依他起性が不即不離であること、遍計所執性は非有（空）であるが依他起性は非空（有）であること、円成実性は非有非無であることが述べられている。遍計所執性は捨遣されるが、依他起性は捨遣されることがなく、円成実性と相待するところに解釈の特徴がある。

また、依他起性と円成実性は異なるわけでもなく異ならないわけでもない。それは無常と無常性、無我と無我性のようなのである。すなわち法と法性の関係であり、それは勝義諦と世俗諦が相待することによる、という。ここでは円成実性と依他起性が相待することを、法と法性の関係や、勝義諦と世俗諦の關係に置き換えて説明している。

また、円成実性を証しなければ、依他起性を見ることはできない。遍計所執性の空（非有）が分らないうちは、依他起性の有（非空）を知ることができないからである。見道（通達位）で、無分別智が真如（円成実性）を証した後、後得智の中ではじめて依他起性を知ることができる、という。これも円成実性と依他起性の相待を前提にした解釈である。以上の説明を図示すると、次のようになるであろう。

〔護法等の解釈〕：常・無常門、依・円二性相待

円成実性〔無為（常）、無漏（浄）〕

依他起性〔有為（無常）、有漏・無漏（染・浄）〕

円満・成就・諸法実性

自相・共相・虚空我等〔有為、有漏（染）〕

体遍・体常・体非虚謬

勝用周遍・究竟・離倒〔有為、無漏（浄）〕

円成実性を常・無常門で解釈することは、前述のように『撰大乘論』の無性の第二積に基づくものである⁽¹⁷⁾。しかし、『撰大乘論』の三性説は遍計所執性・依他起性・円成実性の三性相待であり、『成唯識論』のように依他起性・円成実性の二性相待ではない。また、『撰大乘論』では三性への悟入を、相似悟入（四善根位）、または相似悟入と実証悟入（見道）によって説く⁽¹⁸⁾が、『成唯識論』では三性悟入を実証悟入のみで説く⁽¹⁹⁾。このように、『成唯識論』の三性説の解釈には、『撰大乘論』の三性説

の解釈との相違点も複数存在する。このことは、『成唯識論』の三性説が『撰大乘論』の三性説そのものを再解釈する意図で作られていることを示唆するものである。

五 結語

以上の考察をまとめると、次の通りである。

『成唯識論』の三性説の記述には、インドにおける複数の解釈が紹介される中で、訳者の玄奘が支持する解釈が示されている。

遍計所執性については、難陀等とされる二重遍計の解釈と、安慧・護法等とされる三重遍計の解釈があり、後者が支持されている。前者の解釈は、所遍計を遍計所執性の境、能遍計を依他起性の識と見るものであり、両者の無が円成実性であるという解釈が予想される。これは『撰大乘論』世親釈やそれに基づく撰論学派の三性説の解釈に類似する。玄奘はこの解釈を否定する意味も込めて、前者の解釈を批判的に紹介したのではないかと推測される。

依他起性については、安慧等とされる漏・無漏門の解釈と、護法等とされる常・無常門の解釈があり、後者が支持されている。前者の解釈は、頌には染分の依他のみが説かれ、淨分の依他は円成実性で説かれると見て、依他起性・円成実性を漏・無漏で区別する。後者の解釈は、頌には染分・淨分のすべての依他が説かれていると見て、円成実性・依他起性を常・無常で区別する。前者の解釈は『撰大乘論』の世親釈や無性の第一積に由来し、後者の解釈は無性の第二積に由来する。したがって、玄奘はこの解釈では世親釈よりも無性積を、さらには無性の第一積よりも第二積を支持していたと言える。

円成実性については、護法等とされる二性相待の解釈のみがあり、これが支持されている。円成実性は依他起性の上から遍計所執性を除いたもので、二空所顕の真如であるとされる。その際、遍計所執性は捨遣されるが、依他起性は捨遣されることなく、円成実性と相待する関係にあるという。しかし、『撰大乘論』の三性説は遍計所執性・依他起性・円成実性の三性相待であり、依他起性・円成実性の二性相待ではない。玄奘が三性相待の解釈に言及しないのは、『撰大乘論』の三性説をそのまま支持することができなかつたからであろう。

このように、『成唯識論』の三性説には、撰論学派の三性説の解釈や、『撰大乘論』の世親釈、無性の第一釈、そして『撰大乘論』の三性説そのものに対する批判が含まれていることが推察された。玄奘がインドで学んだ護法等の解釈から見ると、『撰大乘論』の三性説とその解釈には種々の問題があったのだろう。その問題を克服するために新たに示されたのが、難陀・安慧の解釈を批判して護法の解釈を正義とする『成唯識論』の三性説だったのである。⁽²⁰⁾

註

- (1) 『唯識三十頌』大正三一、六一a。
- (2) 『成唯識論述記』卷九本、大正四三、五四〇a以下。『成唯識論』の三性説の諸師の解釈について考察するものに、勝又俊教『仏教における心識説の研究』（山喜房佛書林、一九六一年）二五四―二六五頁、富貴原章信『唯識の研究―三性と四分―』（国書刊行会、一九八八年）九〇―一二七頁がある。
- (3) 『成唯識論』卷八、大正三一、四五c。
- (4) 『成唯識論』卷八、大正三一、四五c―四六a。
- (5) 『成唯識論述記』卷九本、大正四三、五四〇a。
- (6) 『成唯識論述記』卷九本、大正四三、五四〇c―五四一a。
- (7) 同上。
- (8) 『成唯識論述記』卷九本、大正四三、五四〇c。
- (9) これは難陀が唱えたとされる相分・見分の二分説と同様の考え方である。四分説については、拙稿「『成唯識論述記』の伝え安慧の一分説について」（駒澤大学仏教学部研究紀要）七三、
- (10) 撰論学派の三性説については、拙著『中国唯識思想史研究―玄奘と唯識学派―』（大蔵出版、二〇一三年）第一篇第四章「撰論学派の三性三無性説」参照。
- (11) 『成唯識論』卷八、大正三一、四六a―b。
- (12) 『成唯識論述記』卷九本、大正四三、五四四a。
- (13) 同上。
- (14) 『撰大乘論』卷中、大正三一、一四〇c。
- (15) 『撰大乘論（世親）釈』卷四、大正三一、三八八a―b。『撰大乘論（無性）釈』卷四、大正三一、三九九a―b。世親釈と無性釈の相違については、拙稿「中国唯識学派における三性説の解釈について―玄奘訳『撰大乘論釈』を中心に―」（印度学仏教学研究）六五、掲載予定）参照。
- (16) 『成唯識論』卷八、大正三一、四六b。
- (17) 『撰大乘論（無性）釈』卷四、大正三一、三九九b。
- (18) 『撰大乘論』卷中、大正三一、一四三b。

『成唯識論』の三性説の解釈について(吉村)

(19) 『成唯識論』卷九、大正三一、四九c—五〇a。

(20) 玄奘訳『撰大乘論釈』の三性説の解釈については、註(15)所引の拙稿参照。

〈キーワード〉 『成唯識論』、『撰大乘論』、三性説、玄奘、護法